

| | |
|--------------|--|
| Title | 本態性低血圧症の心身医学的研究 |
| Author(s) | 甲斐沼, 正 |
| Citation | 大阪大学, 1978, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/31919 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について <a>〉 をご参照ください。 |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

[39]

| | |
|---------|--------------------------|
| 氏名・(本籍) | 甲斐沼 正 |
| 学位の種類 | 医学博士 |
| 学位記番号 | 第 4181 号 |
| 学位授与の日付 | 昭和 53 年 3 月 18 日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 5 条第 2 項該当 |
| 学位論文題目 | 本態性低血圧症の心身医学的研究 |
| 論文審査委員 | (主査) 教授 金子 仁郎 |
| | (副査) 教授 西川 光夫 教授 阿部 裕 |

論文内容の要旨

〔目的〕

本態性低血圧症の概念については、従来より低血圧そのものを疾病として認めるかどうかという根本的な問題についてさえ、諸家の意見が異なっている。

本症の症状については、まったく無愁訴で一般人と変わらず活躍している者から、自律神経失調症や神経症、仮面うつ病の症状と類似の状態でも長期間療養している者まで多岐にわたっているが、このことも本症の成因や概念の統一された見解が見い出されない大きな原因となっている。

しかし、一般社会のストレスの中で、数多くの活動をこなしていくにあたり、過度ではなく一定の血圧を維持することが必要条件と仮定すれば、本態性低血圧症者が、有事の際に、血行動態がどのような反応を示すかを正常血圧者・本態性高血圧症者の症例とくらべ、比較検討することも重要である。

この際、情動負荷のために現在「心理的ストレス誘発法」として方法論的にも確立されている鏡映描写法を用いることとし、被験者の性格特性や症状の分析のために、MPI(モーズレイ性格検査)、CMI(コーネルメディカルインデックス)を用いて、正常血圧者・本態性高血圧症者と比較対照し、心身相関の立場から研究を行なった。

〔方法ならびに成績〕

精神生理学的研究として、鏡映描写法を用いて情動負荷を行った。

鏡映描写装置は誤描写により 1 KHz の断続音が発するようになっているが、情動負荷のためには不十分と考え 4 KHz の準連続音を発するよう改良した。

対象は、大学関連の健康管理センターに人間ドック受診のため来院した者の内、本態性低血圧症者

72名、正常血圧者68名、高血圧症者21名の計161名である。

鏡映描写法における作業時間については修正した川上分類を用いて分類した。

その結果、正常血圧者群（正常群）と本態性低血圧症者群（低血圧群、有愁訴・無愁訴を含む）では、その分布に特に有意の差はみられず、A型（プレート型）次いでB型（スローブ型）が多かった。本態性高血圧症者群（高血圧群）ではA'型（プラトー型）やC型（ジグザグ型）E型（不能型）が多く、正常群や低血圧群とくらべ分布の相違がみられた。

一方、情動負荷による血圧の変化についてはまず最高血圧について、正常群においてはII型（軽度緊張型）が最も多く、低血圧群ではII型とI型（安定型）III型（緊張型）IV型（動揺型）およびV型（緊張遅延型）に分布し、反応の複雑さをみせた。高血圧群についてはIII型が特に多く、情動負荷に対し緊張を起しやすいくことを示した。（他群と5%で有意）

最低血圧については低血圧群、正常群、高血圧群の各群の変化に有意の差はみられなかった。

以上の結果から情動負荷に対し、高血圧群が最もよく反応し、正常群では適度の反応しかみせないのに対し、低血圧群では反応がやや複雑で種々のタイプにわかれることがわかった。その反応も最高血圧が示す変化が中心で、最低血圧は付随的な反応を示すにとどまった。

脈拍については各群に有意差なく、血圧が示す変化より少なかった。

臨床心理学的研究として、CMI・MPIの各検査を鏡映描写テストの前に施行した。

低血圧群についてCMIの深町分類により、I、II型を無愁訴群、III、IV型を有愁訴群として、各群と鏡映描写テストの結果との関連について検討した。

その結果、作業時間や誤描写時間、誤描写回数などのtask performanceと、有愁訴・無愁訴各群との関係は、特にかたよりはなく有意の差はみられなかった。血圧の変化との相関については無愁訴群では、血圧の変化についての分類でIII型が最も多くI型やIV型はほとんどみられなかった。逆に、有愁訴群ではI型・IV型が多く無愁訴群と有意の差を示した。（ $P < 0.05$ ）

MPIの各尺度と鏡映描写テストとの利関について、まず外向性・内向性尺度との関係は各群間で、特に有意差はみられず、またうそ尺度との関係についても有意の差が示されなかった。

神経症的傾向尺度との関係について、MPIの高得点グループ（35点以上）、中間グループ（34点～14点）、低得点グループ（13点以下）に分けて検討した。その結果、低血圧群と正常群は症例が各グループにわかれ特にかたよりはみられなかったが、高血圧群では高得点グループが最も多く、次いで低得点グループが多かった。

一方、低血圧群のうちで高得点グループに属するものは、血圧変動に関する分類でI類とIV類が有意に多く神経症的傾向が強いものは血圧の変化が少ないが、あっても動揺する傾向にあることが示された。

以上の結果から低血圧群においては、ストレスに対して血圧が一定の上昇を示すものは愁訴も少なく、上昇があっても神経症的傾向の高いものは愁訴が多くなることがわかった。

〔総括〕

1) MCTの作業時間については正常群と低血圧群は、A型とB型が多く、高血圧群ではA'型・C型・

E型などが多く、きわだった対照をみせる。

- 2) MDTによる血圧の変動については、高血圧群では緊張型が多く情動負荷の影響を受けやすいのに対し、正常群では一定の血圧上昇しかみられない。一方、CMI深町分類による低血圧群における有愁訴・無愁訴群の分類においては、無愁訴群では緊張型が多く、情動負荷に対し正常血圧の領域まで血圧上昇が可能であることを示し、有愁訴群ではまったく反応しないか、反応しても動揺が大きいことを示す。
- 3) 低血圧群のうち、MPI (N尺度) で高得点グループに属するものは、血圧の変動が少ないか、あっても動揺する傾向にある。
- 4) 以上の点から、低血圧群においてはストレスに対し、血圧が一定の上昇を示すものは愁訴が少なく、上昇があっても神経症的傾向が高いものは愁訴が多くなることがわかった。

論文の審査結果の要旨

本態性低血圧症の概念については、従来より、低血圧そのものを疾病として認めるかどうかという基本的な問題についてさえ、諸家の意見が異なり、発症・症状などについての検討があまりなされていない。

著者は、鏡映描写法を用いて情動負荷を行ない同時に連続的に血圧・脈拍を測定し、正常血圧・高血圧症と対比して、低血圧症の内でも愁訴の有無によりストレスに対する反応が異なる事を認め、症状発現と関係がある事を明らかにしたものであり、価値ある業績と考える。